チャンダナ　（所報）令和７年７月15日発行（季刊発行・第56巻　第１号）

CANDANA

No.301　2025　SUMMER　中央学術研究所

てらもうでいっぷく

明日への提言

音楽の神秘について
荒牧　小百合（洗足学園音楽大学／聖徳大学講師）…… p.2

研究ノート

西洋における「心田を耕す」伝統（Ⅵ）
綿貫　丈雄（学術研究室）…… p.7

研究所だより

Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series 10, 11
（大乗仏典思想叢書第10号・第11号）を発刊 …… p.12

音楽の神秘について

荒牧　小百合（洗足学園音楽大学／聖徳大学講師）

はじめに

音楽には不思議な力があります。

戦争や事故などで心の傷を負った人々の、カウンセラーの言葉でも癒えない傷でさえ、音楽を聴くと慰められたり癒されたり元気づけられたりすることがあります。また、音楽療法がガンなどの治療に直接使われるわけではありませんが、精神的な、傷以外の身体的な治癒力を高めたりすることが分かっています。

音楽療法は、古い時代から似たようなことが行われていましたが、第二次世界大戦後、アメリカの退役軍人の心のケアにおいて改めて音楽の癒しの力が注目されて発展していったようです。まだ比較的新しいこの分野は、これからも研究が進んでいくため、その効果は未知数ともいえるでしょう。

私たちが普段耳にする「音楽療法」の多くは、患者さんが施設内のホールなどに集まって生で演奏を聴いたり、一緒に歌ったり、体を動かしたりというスタイルです。音楽は楽しい時間を過ごして気分を明るくするだけでなく、予想もしていなかった成果を得ることができると研究でわかっています。たとえば、重度の認知症の患者さんで記憶力が大幅に低下しているかたが、音楽を流すと、５番まであるような童謡や唱歌の歌詞を完全に思い出して間違えることなく歌うことができたり、病により動かなくなってきたほうの手が音楽に合わせて動き始めたり、無表情であまり反応のないご高齢のかたが笑顔になったり、リハビリをする時に躍動感のある音楽が流れると、楽に感じられたりします。読者のなかでも、懐かしい音楽を聴いた時に、すっかり忘れていた昔の記憶が鮮明に思い出される体験をした人は少なくないでしょう。これらは音楽の不思議な力が作用した現象のほんの一部ですが、認知症や身体的にリハビリを必要とするなど、重度の症状をお持ちの患者さんにとっては、その進行を遅らせるなど、治癒への大きな希望となります。

音楽療法には生演奏の他、CD などの機械から流れる音楽を使った療法でも研究が進んでおり、多くの効果が発表されています。酷い痛みや気持ちが沈みがちな患者さんの心を和らげたり、病気による脳の損傷で不自由になった手足や言語のリハビリに使われたりします。

このような方法以外でもさまざまな種類の音楽療法があり、それぞれが高い効果をあげるなか、演奏家である私が注目したいのは生演奏で行う療法についてです。今回はさらに一歩進んで、患者さんの目の前で、そのかたのためだけに演奏される音楽の作用、また同じ空間にいる医療スタッフや家族に与える影響についても考えていこうと思います。

クレール・オペール氏の活動を通じて ～音楽療法の未知なる可能性～

2023年初秋フランス大使館から、チェロ奏者で音楽療法士であるクレール・オペール氏との対談のお話をいただきました。チェロを奏でる音楽療法の記録が書かれた彼女の著書が日本語に翻訳された

ので、その出版にあたり、日本のいくつかの学会で研究発表が予定されていました。大使館でもこの機会に著者を招き、全国で対談のイベントを企画したのです。私は音楽療法の専門家ではないので、他の適任のかたにお譲りして、当日は対談を聞きに伺いたいとお返事したところ、演奏家の立場で対談してほしいということと、二人でぜひ一緒に演奏もして欲しいというご要望でした。私としてもそれは非常に嬉しく、貴重な機会だとも思ったのでお受けすることにいたしました。そして早速、出版社から送っていただいた原稿を読み始めました。

『シューベルトの手当て』というその本は、療法士としての冷静な観察と、医師や看護師が協力して根気よく綿密に集めたデータ、そして音楽家の視点でそれらを捉えている点で、私にとって興味深い内容でした。また芸術家の優しい眼差しと、鋭く透明感のある感性が文章にもよく現れていて、表現や言い回しは読み物としても、非常に魅力的な本でした。

オペール氏が奏でるチェロの響きは、重度の自閉症のかたとコミュニケーションを取ることに成功し、認知症のかたの記憶を呼び覚まし、終末期の患者さんの心と体の痛みを緩和させました。そして音の調べは、付き添っているご家族や治療を施す医療スタッフの心にも優しく届いて癒しとなることが証明されました。

当初はチェロを弾くことだけで現場に関わっていたオペール氏でしたが、その後必要を実感して医学部で専門的に勉強し、様々な事例を理論的にデータ化して分析を行いました。この研究の成果が、医療スタッフと連携する効果的な治療に繋がっていったことは想像に難くありません。芸術と医療両方の知識と技術を併せ持った専門家はまさに理想的です。音楽によって患者さんの痛みが緩和されリラックスすると、医療スタッフは治療がしやすくなり、患者さんにとって、最も大切である心の安らぎを得ることができます。尊厳ある最期を迎えられることに音楽療法は貢献しているのです。

オペール氏の著書に添えられている文章と本文から少しご紹介します。

「10分間のシューベルト＝5ミリグラムのオキシノーム（モルヒネ）」（緩和ケア担当医の証言）

2012年4月、パリの認知症患者のための老人ホーム。ある入居者が、包帯の交換の際に痛みで悲鳴を上げていた。

なんとかしようと看護師たちが格闘していた。ところがクレールがシューベルトを弾きはじめると、患者は急に静かに――。

老人はその後も、クレールのチェロ演奏があるときに限ってつらい処置を受け入れるようになった。音楽が痛みを和らげ、症状を緩和したのである。この本は自閉症患者や認知症患者などの前で音楽を奏でてきた希有な人物の物語だ。
（『シューベルトの手当て』の説明文より）

・患者の痛みは10～50％軽減し、不安解消のプラス効果は90％近く、看護師への好影響は100％
・重度の自閉症患者たちとの驚くべきコミュニケーション

（本書プロローグより）

オペール氏が大切にしているのは、その人のためだけの生の演奏です。どの施設においても、患者さんと一対一で音楽による対話を行います。すでに意識がなくなった患者さんの個室でチェロを弾き始めた時、その患者さんの呼吸が次第に深くなり、胸が大きく波打ったと書かれていました。身体の色々な機能が失われても、耳は最後まで聞こえて反応するそうです。

対談に先立ち、オペール氏が東京都立駒込病院のホスピス病棟と外来でコンサートを行うと聞き、見学させてもらいました。

当初ホスピス病棟では、個室を訪れて演奏する彼女のスタイルで行う予定でしたが、時間の関係で限られた人しか演奏を聴けないのは残念だという声が多く上がったため、ホールに集まって演奏を聴くことになりました。

時間が近づくと、それぞれのお部屋から、看護師に車椅子やベッドを押されて患者さんたちが集まってきました。

それはとても静かな時間でした。オペール氏が皆さんにあいさつをしてチェロを奏で始めました。しばらくすると、ベッドに横になっているかたの手がゆっくり持ち上がり、何かを伝えるような動きをし始めました。その他にも、目を開けたり閉じたりして気持ちを表現しようとしているかたも見受けられました。大きな拍手はなくても、その場にいる人たちが皆、チェロの音に耳を澄まし、体全体で音楽を感じているようでした。

この日は演奏のなかで静かに息を引き取るかたがいらっしゃいました。最期のときに音楽の翼に乗って旅立たれたかた、そしてそばにいたご家族にとっても癒しと慰めとなりました。オペール氏は、チェロを弾きながらその様子を感じていたそうです。

ホスピス病棟でのミニコンサートの後は、病院１階の外来受付のフロアで２回目のコンサートが行われました。次第に集まる患者さんや付き添いのかた、入院しているかた、病院スタッフたちでフロアはいっぱいでした。特に印象的だったのは、たくさんの医療スタッフと、熱心に聴き入る彼らの様子でした。忙しい診察の合間を縫ってその場に駆けつけた姿が、砂漠で水を求める人のように、チェロの音色を心から求めているように私には見えたのです。ある医師は、「今日のこの時間を本当に楽しみに待っていたのです」と熱を込めて私に話してくださいました。

オペール氏の本のなかにも、医療スタッフの声が紹介されています。チェロが奏でられると、いつもよりも楽に仕事をすることができたことや大きな声を張り上げなくなったこと、そして何よりも、看護の動作もより落ち着いて、やさしくなったという感想でした。そして体験した人の全てが、音楽による療法は有効だと答えています。

生の演奏の素晴らしいところは、演奏者の呼吸感も伝えられることです。先にも書きましたが、チェロの響きに導かれるようにして、意識のない患者さんの胸が少しずつ波打ち、深く呼吸し始めることが確認されています。また同時に、演奏の音は空気の振動で聴く人に伝わるため、耳だけでなく、皮膚全体で受け取ることができます。「音楽をきく」とき、イタリア語では「聞くascoltare」ではなく「感じる sentire」の動詞を使います。目の前で奏でられる音楽は空気の振動を通して体内の水や骨に伝わり、感じることができるのです。

今まで症状が重度の患者さんの話を取り上げてきましたが、軽度の患者さんにとっても、好みの曲や聴きたい曲を演奏してもらうことは大きな楽しみや喜びになります。演奏者にとっても、目の前の患者さんの様子を見ながら演奏の仕方や曲を選ぶことができるので、その時々の必要に応じて柔軟に最適な方法を取ることができるのはとても理想的です。

ヴェルディの家

イタリアのミラノに「ヴェルディの家（Casa Verdi）」という高齢者施設があります。「音楽家が、引退後も生涯音楽的な生活ができるように」という作曲家ヴェルディの願いを込めて1902年に設立され

た「音楽家のための憩いの家」として作られたのです。

オペラ演出家でもあるダニエル・シュミット監督が、この「ヴェルディの家」に住む、往年のオペラ歌手やバレリーナたちを取材したドキュメンタリー映画『トスカの接吻（IL BACIO DI TOSCA）』を1984年に発表しました。これは、彼らが昔を思い出しながらオペラを歌い演じる姿を捉え、芸術の永遠性を訴える作品です。この作品のなかで、いくつもの印象的なシーンが出てくるのですが、共通しているのは、長い年月を隔て、どんなに歳をとって体が不自由になっても、かつて歌い慣れ､踊り慣れた音楽が流れると、思いがけず体が反応して動き出し、歌声が溢れ出るということです。私はこの映画を観て、音楽の不思議な力が彼らを突き動かしているように感じました。

この「ヴェルディの家」では、高齢者の他に、コンセルヴァトワール（音楽学校）の学生たちも住んでいるのがもう一つの特徴といえましょう。学生たちはここでコンサートを開いたり、豊かな経験と知識を持つ老芸術家たちからアドバイスやレッスンを受けたり、人生についても相談することができます。若い彼らにとってまたとない学びの環境になるだけでなく、高齢者たちにとっても、自らの経験が生かされ必要とされることで生き甲斐を感じるとともに、未来ある若い人たちの成長を見守れる喜びがあります。これは音楽を通じた交流が人生を豊かにする素晴らしい例です。

音楽療法におけるモーツァルト効果

音楽療法の分野では有名な「モーツァルト効果（The Mozart effect）」の研究が報告されています。フランスの耳鼻科医、アルフレッド・トマティスの著書『モーツァルトを科学する～心とからだをいやす偉大な音楽の秘密に迫る』のなかで、高周波音を多く含むモーツァルトの音楽には様々な効果があるというのです。その効果は、以下の11個とされています。

①日々の生活のなかで創造力や想像力を育てる作用があること
②会話におけるヒアリング能力を高めること
③不安やストレスを減少させる作用があること
④記憶力を高め、認知症を改善させること
⑤精神的な安心感を誘導し、幸福感を高めること
⑥心臓の作用を安定化させ、心拍の安定化を図ること
⑦血圧を安定させること
⑧脳波をリラックス状態に導き、アルファ波を引き起こすこと
⑨ストレスホルモンを減少させる作用があること
⑩免疫力を高め、健康に導くこと
⑪エンドルフィンの分泌を促し痛みの緩和効果をもたらすこと

そして音楽によって変化するのは人間だけではないようです。モーツァルトの音楽を犬や猫といったペットに聞かせることで、心理状態を落ち着かせてリラックスさせる効果があることが近年の研究でわかってきました。牛舎でモーツァルトの音楽を流すとホルスタインのミルクの出が良くなったり、植物に音楽を聞かせると光合成が活発になり成長が促進されたり、トマトの甘みが増したり、発酵食品の味噌や日本酒の熟成が早まったりしたという結果も報告されています。また、ハーバード大学の実験において、生体臓器移植をしたマウスは７日間しか生きられないけれど、モーツァルトの音楽を聞かせると、平均20日間生きられるようになったそうです。

オペール氏が明らかにした数多くの音楽療法の結果と照らし合わせたとき、音楽を耳で聴くだけでなく体全体で感じて脳にも影響を与えることが証明されています。ですから聴覚器官を持たない植物や微生物、また聴覚に障がいを持つかたも音楽を享受することができるのです。人間も動植物や微生物も体内の70～90％が水でできています。その細胞内の水環境に高周波音が振動として作用して影響を受けるわけです。これは自然のなかに存在する様々な音、鳥のさえずりや虫の音、川のせせらぎや風が木の葉をゆする音のなかにも、耳には聞こえなくても高周波音は存在していて、それを感じることで気持ちが安らいだりリフレッシュしたりできるのと同じ効果です。

CD やデジタル放送などの機械では、「聞こえない音は不要なもの」と判断されて、残念ながら高周波音が大幅にカットされていますが、自然の音や生演奏のなかではそれが豊かにあって、たとえ耳で聞こえなくても、皮膚で感じることができるのです。そして音楽には薬のような副作用はなく、体の痛みとともに心も癒され、明るく穏やかな気持ちにしてくれる魔法ともいえる良薬です。

音楽療法を効果的に用いることにより、不思議な力が作用して、全ての患者さんが心穏やかに、最期の時までその人らしい尊厳ある人生を送ることができることを心から願います。

〈参考文献〉
クレール・オペール（Claire Opperr）著／鳥取 絹子 訳『シューベルトの手当て（Le Pansement Schubert)』（アルデスパブリッシング 2023年）
アルフレッド・トマティス（Alfred Tomatis）著／窪川英水 訳『モーツァルトを科学する～心とからだをいやす偉大な音楽の秘密に迫る（Pourquoi Mozart)』（日本実業出版社 1994年）
村井靖児著『音楽療法の基礎』（音楽之友社 1995年）
村井靖児著『音楽療法を語る～精神医学から見た音と心の関係～』（聖徳大学出版会 2004年）
野田 燎/後藤幸生 共著『脳は甦る～音楽運動療法による甦生リハビリ』（大修館書店 2000年）
久保田牧子 著『歌声が心に響くとき～音楽療法との出会い～』（悠飛社 2002年）
スーザン・マンロー（Susan Munro）著／進士和恵 訳『ホスピスと緩和ケアにおける音楽療法（Music therapy in palliative/Hospice care)』（音楽之友社 1999年）

◆プロフィール◆

荒牧　小百合（あらまき　さゆり）　（1972年生）

熊本県生まれ。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業、同大学院修士課程修了。洗足学園音楽大学非常勤講師、聖徳大学講師。日本声楽アカデミー会員。

2019年ウィーンで開催された日墺修好150周年記念公演にて E. オルトナー指揮のモーツァルト「レクイエム」でソプラノソロを務めた。外務省認定事業「2018-2019ロシアにおける日本年」では３度にわたってロシアに赴き、モスクワや近郊都市で数々の演奏会に出演した他、ギーチス演劇大学オペラ科で「日本の歌」のワークショップを開催。この他スイス、クロアチア、スロヴェニアでも演奏の機会を得ている。オペラチックナイトを主宰し、これまでに《椿姫》《アイーダ》《蝶々夫人》《トスカ》《カヴァレリア・ルスティカーナ》をプロデュース及び主演を務める。趣向を凝らした舞台は、オペラを初めて観る人から好評を博している。

西洋における「心田を耕す」伝統（Ⅵ）

綿貫　文雄（学術研究室）

ヴァーチュオーソ【virtuoso】〔イタリア語からの借用〕［名詞］**1.a.**† 学識のある人。学者。特に科学者、自然哲学者。特に王立協会会員。（†廃語）**1.b.** 美術に特別な興味や趣味を持つ人。古美術品、自然の珍品、希少品などの収集家や研究家。鑑定家。特にアマチュアや趣味人としてそのような趣味を追求する人。（歴史的用法）… **2.b.** 音楽家または芸術家や表現者で、高度な技量のある人、超絶技巧を披露する人。（現在の一般的用法）…

——— *Oxford English Dictionary*

古代、キケロは「心を耕すことが哲学である」と言った。それはソクラテスの医薬によって魂を癒やし、心の田畑に徳の種を蒔き、悪癖の雑草を刈り、人格を涵養して徳の実りを収穫する、自己修養の鍛錬（アスケーシス）であった。

教父アウグスティヌスにとって、魂を癒やす心の医師は神であり、恵みに感謝し、信仰を告白し、罪を懺悔する礼拝こそ、魂の耕作であった。やがて、神の教説を受持する聖句を詞華集 *florilegia* に書写し読誦するなどの、スピリチュアル・エクササイズ *exercitia spiritualia* が発達していった。

9．科学で心を耕す

気体の体積 V と圧力 P は、温度が一定のとき互いに反比例し、PV＝［一定］の関係にある。これを17世紀イギリスの科学者・哲学者 Robert Boyle（1627–1691）にちなんで「ボイルの法則」という。[1] また、ばねの伸び縮みする力 $\boldsymbol{F}$ は、自然長からの伸縮 $\boldsymbol{x}$ に比例し、その逆向きに働く。ばね定数を k とすれば、$\boldsymbol{F}=-k\boldsymbol{x}$ と表せる。この関係はボイルの助手であった科学者 Robert Hooke（1635–1703）の名をとり、「フックの法則」と呼ばれる。細胞 Cell の命名にも名を遺すフックの『微小世界図説』*Micrographia* は、出版当時ロンドンで大きな話題となった顕微鏡観察記録である。『秘められた日記』で知られる政府高官のサミュエル・ピープス（Samuel Pepys, 1633–1703）も、製本所で見つけるなり予約注文し、後日この「人生で読んだ中で最も独創的な本」を入手すると「夜中の２時まで読み耽った」と記している。[2]

9.1　草の根の科学

ボイルもフックもピープスも、「ロンドン王立協会」Royal Society of London のフェローFRS もしくは会長 PRS を務めた人物だ。

いま、通例に従って「王立協会」と訳したが、実際には王室が設立したわけでも国家予算が割り当てられたわけでもない。ただ、国王が自らも参加していた民間の私的会合に勅許状を授け、集会・出版その他の学会活動を認可しただけである。

したがって実状を反映するには「王認学会」と表記すべきだという提案もあり、筆者もこれに賛成である。[3] なにしろ王家や国家が主導した上意下達の組織ではなく、草の根から自主的に発足した会合

1　もちろん理想気体を前提としている。

2　*The Diary of Samuel Pepys*, Mon. 2; Sat. 21, Jan.（1664/65）. https://www.pepysdiary.com/diary/

である。共同で実験を行い、記録を報告し合う会場も、市民大学を間借りしたり会員の公爵宅に集うなど、会費を出し合って運営していた。ロンドン王認学会は、メディチ家のフィレンツェ実験学会Accademia del Cimento やルイ14世のパリ科学アカデミーAcadémie des Sciencesとは、決定的に性質を異にしたのだ。

9.2　実験哲学とヴァーチュオーソ

もっとも、当時はまだ「科学」scienceの単語に現代のような意味はなく、それは中世以来の神学やスコラ哲学のように、公理から演繹により導かれる思弁的知識体系 *scientia* を指していた。むしろ現代の「科学」に該当する研究分野は、博物学・自然誌 natural history あるいは**実験哲学 experimental philosophy** と呼ばれていた。王認学会の標語「権威に拠らず」（*nullis in verba*）からは、たとえ哲学上の命題であろうとも、検証可能な論点は実験によって決着をつけようとの意気込みが伝わってくる。

自然誌はその学問的性質から、必然的に膨大な観察事実と実験結果の蓄積を要求する。現代でも新しい小惑星や昆虫の新種の発見など、科学の発展にはアマチュアの寄与（contribution）が欠かせないのは周知のとおりだ。

王認学会も、後の理科年表や教科書に載るような「科学者」だけでなく、多くのアマチュア愛好家へも門戸を開いていた。草創期の顔ぶれをみると、医者と学者が３割で、残りは多種多様な貴族・職業、そして聖職者が占めている。[4]

こうした新しい方法論で自然を探求した者を「実験哲学者」、あるいは17世紀に特有の用法で「ヴァーチュオーソ」という。現代ではイタリア語の語源どおり、主にジャズやクラシックで超絶技巧を披露する演奏家「ヴィルトゥオーゾ」を意味するが、当時は王認学会のフェローたちも、初めはその深い学識に尊敬の念を込めて、しかし次第に「好事家」との揶揄も込めて、そう呼ばれるようになった。

トーマス・シャドウェルの『ヴァーチューソ』なる喜劇には、ボイルやフックなど実在するフェローたちが物笑いの種にされている。このことからも、実験哲学が当時の社会から懐疑的な眼差しで受け止められていた一端が窺える。懸念は、医師会のお偉方からも発せられた。

> 新種のヴァーチュオーソといえるこの混乱した奴らと彼らの詭弁的精神、方法、英語の著作、実験、内科処方はイングランドのあらゆる名家に影響を与えつつある……長い歴史をもち、確固とした地位にあり、是認されているわれわれの医学実践を破壊に導こうとする、偽医者、インチキ薬売り、化学薬剤師……新しがり屋のバカ者たちが、大学の由緒正しきアリストテレス主義の学問［に挑戦している］。[5]

国教会の牧師にして文学者のジョセフ・グランヴィル（Joseph Glanvill, FRS, 1636–1680）も実験哲学に熱心だったが、庶民が王認学会を「無神論者、カトリック教徒、バカ者、あらゆる学問への断固たる敵対者の巣窟」だと信じるようになった、と嘆いている。

好学の志士と、物見高いディレッタント――この相反する評価の間で揺れるヴァーチュオーソたちが所依としたのは、

3　ロバート・フック『ミクログラフィア：微小世界図説』板倉聖宣・永田英治抄訳、仮説社（2013年・初版1984年）。
4　マイケル・ハンター『イギリス科学革命』大野誠訳、南窓社（1999年）51, 84頁。
5　同、154頁（注８–９）。

彼らが自然誌中興の祖と仰ぐフランシス・ベイコン、および哲学と神学という二つの伝統である。

9.3　哲学と神学：二つの伝統

ベイコンと同時代を生きたリプシウス（Justus Lipsius, 1547–1606）も、「精神を耕す」自然の探求には、謙虚かつ偉大な精神をもたらす効果があると考えていた。

> 自然学を、秘められた事柄への好奇心からではなく、熱心に**精神を耕す**者として…その目的を念頭に置いて考察しようではないか。…セネカ曰く、「この世界に対して神に与えられた地位を、精神は人間に対して与えられている」と。つまり、精神は…感情や欲望、人間のあらゆる〔内面的な〕ものを制し、支配し、従わせるべきなのだ。これが、最終的な目的、幸福への道である。[6]

自然学の真の目的は、自らを神の似姿とすべく、人間の肉欲に発する情念を、理性を以て調御する、精神の涵養なのだ。

「折衷主義者」eclectic を自認するリプシウスは[7]、古代ストア主義哲学から、キリスト教と共通する言説のみを抽出しつつ、その教義に反する言説は躊躇なく捨象し、〈理性の哲学〉と〈信仰の神学〉という二つの伝統を融和的に体系化した。[8] このような立場が**「新ストア主義」Neo-Stoicism** である。

ラテン語で書かれたリプシウスの『不動心 *Constantia*』は英語にも翻訳され、イギリスでも幅広く読まれた。魂や心の「安定性」「不変性」Constancy という概念は、判断や言動の「一貫性」「節操」でもある。

ベイコンも同様に、健全な精神とは「不動心」であり、「情念という心の病から自由であること」としている。[9] すなわち、心の「薬・医学」「浄化」「修養」は、道徳哲学と自然哲学の改革によって可能になるのだが[10]、それはまた、アダムとイブが堕落する以前の人間の魂を回復する信仰の道でもある、と。[11]

9.4　心の医師

医師であり哲学者だったウォルター・チャールトン（Walter Charleton, FRS, 1619–1707）の対話篇には、「心の医師」なる人物が登場する。「不安」に悩む主人公が、「不動心」と「心の静寂」をいかに身につけるべきか助言を求めると、心の医師は「哲学の治癒効果」と「道徳的教訓」を再認識せよと答える。[12]

ここでの理想とされる人物像も、キケ

6　Lipsius, *Physiologia Stoicorum*,（1604）III.iii.19, p.352. Lagreé, *Juste Lipse et la restauration du stoïcisme Suivi de textes de Juste Lipse*, Vrin, Paris（1994）は *cultores* を adeptes と意訳するが、キケロの比譬を直接に用いていると読むべきではないか。

7　Lipsius, *Manuductionis ad Stoicam Philosophiam*, I.v（1604）. Cf. Jan Papy は折衷主義のモデルがキケロであったと主張: 'Justus Lipsius as Historian of Philosophy', in A. Ossa-Richardson and M. Meserve Ed., *Et Amicorum*, Brill,（2018）405.

8　Lipsius, *Constantia*, 第２版序文：「Augustinus の忠告は、哲学者によって書かれたものを選別し、《よいものだけを不正な所持者から切り離して、我々の用途に利用せよ》ということであるのを私は知っている」。Cf. 羽賀賢二「Justus Lipsius の『恒心論』とストア主義思想」、『言語文化研究』26号（2011）注15.

9　Bacon, "Advice to Rutland," M. Houghton Ed., *The Works of Francis Bacon*（*WFB*）, Longman, 9: 7.

10　Bacon, *Advancement* II. 22（6）, *WFB*, 3: 437.

11　Bacon, "Praefatio," *Instauratio Magna*, *WFB*, 4: 20.

12　Charleton, *Immortality*, 12–13, 42–43.

ロやセネカなど、古代ヘレニズム学派の「折衷」である。[13]自己認識と人格の陶冶を通じて哲学的な平穏を目指し、動揺した心に、理性の治療を施すのだ。[14]

ベイコンの遺作の「続編」としてグランヴィルが構想した作品にも、神学者が「心の医師」として描かれている。その研究対象は「宗教における理性の役割」「神の恩寵と人間の努力との共働」という、まさしく神学と哲学の統合である。

> その力は、自己の意志を鎮め、情念を律し、欲望を緩和し、神と隣人への真に正しい行為に宿る。[15]

アウグスティヌスの教えも、これを「主義（イズム）」とする立場からは、人間の心を救えるのは神をおいて他になく、ただひたすらに神の恵みを待つ以外に救いはない。しかしこれが緩和されて新ストア主義に基づくと、聖職者や医師、そして実験哲学者も「心の医師」たり得るのだった。

9.5　独断主義と懐疑主義：二つの病

大司教も務めた文学者トーマス・スプラット（Thomas Sprat, FRS, 1635–1713）は、著書の一項目を「心の治療に役立つ実験哲学[16]」と題している。

人は、判断を誤って探求を進めると、独断主義と懐疑主義という両極端に偏っていく。独断と懐疑は、ともに認識の働きを狂わせる〈心の病〉であり、どちらも「性急」かつ「軽率」な判断が原因である。

> 彼らの理論は整然としているが、自然の神秘への探求を打ち切り、虚栄と矛盾にしか役立たない。[17]

逆に、本来的に能動的な活動である実験哲学なら、「人間の思考に優れた医薬を与え、放縦を防ぎ、道徳と同じ役割を果たしうる」。実験は「思考を組み立て、浄化する」うえで、確実に効果がある。[18]

チャールトンもまた、「情念のこもった議論」や独断主義を批判しつつ、これと対照的に〈慎重な探求〉という規範的態度を打ち出す。これはまさに王認学会のモットーとして提唱されたものだ。[19]

一方、懐疑も場合によっては心の治療になると考えたのがフックである。ここで重要なのは、「仮説的懐疑」という心の調御法である。

> 何であれ、自分が真理と思い込み、受け入れている物事に対して、〔一度〕すべて懐疑してみることだ。

ただし、これはあくまで「探求の技法」としてのみ有効で、徹底的な懐疑主義を容認するものではない。[20]

フックが目指した〈知性の正しいあり方〉は、模範的な「自然誌家」という人物像に反映されている。それは「きわめて虚心坦懐で、先入観から自由」であり、自己のためではなく、真理のために挺身する心である。

> あれこれと提唱される仮説の誤りを実験で

13 E. Booth, "*Subtle and Mysterious Machine*," Springer（2005）, Ch. 3, §1, 54.
14 Charleton, *Epicurus' Morals*, 'The Contents in Scheme'.
15 Glanvill, "Anti-fanatical Religion," *Essays*, 25. Cf. also *Philosophia Pia*, 66.
16 Sprat, *History of Royal Society*, III, §.13 の表題。
17 Sprat, *History*, 32–34.
18 *ibid.*, 342–43.
19 Charleton, *Immortality*, 16.
20 Hooke, *General Scheme*, R. Waller Ed., *The Posthumous Works of Robert Hooke*, London（1705）11.

> 発見していくと、どの仮説からも（心は）解放されて固執しなくなり、いつ真理が提示されようと、自由自在に認識し、受容できるようになる。[21]

このような実験的検証と「ソクラテス的懐疑」の循環によって、自己認識の努力と、絶え間ない判断の修正を迫られる。するとやがて、ゆるぎない心、隷属から解放された心などの徳目が備わっていく。

9.6　知性が交流する場

ベイコンは人の感情について、仲間といるときの方が、孤独なときより高まると言った。[22]スプラットはこの一節を引用して、同じ現象は感情だけでなく、知性の働きでも起こりうると指摘する。

> 集会では、人の知恵が互いに研ぎ澄まされ、理解力が高まり、思考が豊かになる。[23]

また、「実験結果の推測や議論」を心の治療として用いるには、一人や二人ではなく、共同で取り組む必要がある。

> 自然界の仕組み全体を理解し、永続的な結論を導くには、注意深く、冷静に考え、厳密に検証することが必要不可欠だ。これは一人の哲学者個人の胸中だけを探しても決して見あたらない。…

互いの意見を控えめに主張し合い、慎重に討議を重ね、情念を理性で制するなかで培われるのは、「普遍性」「客観性」という、実験哲学が掲げた徳目である。

ただし、現代的な意味での科学的客観性とは異なり、当時の観点では人格の消去を伴わない。むしろ、人格の変容と生き方の向け換えという、あくまで属人格的な「徳目」なのだ。

フックは自然探究において、いかにして心を制御すべきかを説いている。例えば、「対立する考えに慣れること」で頑固さをなくす〈柔軟性の修練〉や、判断を制御する〈修練としての議論〉である。

> いかなる観念もすぐ確実だと決めつけず、承服するに足りる十分な議論と推論で、完全に確認されるまで留保すること。自分の心の傾向と調和し、好ましく思えるものでも、常に疑うこと――[24]

このような習慣は、人格の涵養された同好の士と交流して初めて身につくものである。賢明な友の「心」は、ベイコンのいう幻影 *idola* たる洞窟の外から自分自身を見つめ、不完全な検証で満足するような自己中心から救い出だしてくれるのだ。

「異なる気質の交流」は、ともすると偏りがちな個々の気質のバランスをとる効果がある。[25]王認学会は、「賢明で思慮深い友人」が集い、心を癒やし鍛錬し合う、いわば〈道場〉なのであった。

かくして西洋における「心田を耕す」伝統は、17世紀の英国に至って、近代科学が萌芽する土壌となった。　（つづく）

主要参考文献

- Sorana Corneanu, *Regimens of the Mind*, University of Chicago Press (2011).
- *Oxford Text Archive*, Bodleian Libraries, University of Oxford. https://ota.bodleian.ox.ac.uk/

21　Hooke, *General Scheme*, 19–20.
22　Bacon, *Sylva Sylvarum*, experiment 988, *WFB*, 2: 667.
23　Sprat, *History*, 98, 99.
24　Hooke, *General Scheme*, 10.
25　Sprat, *History*, 85.

Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series 10, 11（大乗仏典思想叢書第10号・第11号）を発刊

このたび、弊研究所は学術研究室の西康友主幹と黛千洋・同研究所特別研究員による *Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series 10, Sutta-nipāta, Dhammapada, Theragāthā, Therīgāthā, Jātaka, Mahāvastu-Avadāna, Lalitavistara, and Saddharmapuṇḍarīka, Parallel and Similarity Pāda Index*（大乗仏典思想叢書第10号『スッタ・ニパータ、ダンマパダ、テーラガーター、テーリーガーター、ジャータカ、マハーヴァスツ－アヴァダーナ、ラリタヴィスタラ、梵文法華経　並行・類似詩脚索引』：左）を１月17日付で、また西主幹による *Philosophica Mahāyāna Buddhica Monograph Series 11, Kern-Nanjio' s Edition Romanized Text Series IV Saddharmapuṇḍarīka Kern-Nanjio' s Edition in Roman Script with Complementary Footnotes*（同叢書第11号「梵文法華経『ケルン・南條校訂本』ローマ字本・脚注補完第４分冊」：右）を５月15日付で発刊した。

本叢書第10号は上記の初期仏典と初期大乗仏典の電子化テキストをPCプログラムに媒介させて、レーベンシュタイン距離（二つの文字列を同一にするために必要な最少の編集操作回数の数値）による類似率60.7％以上の偈文句を類似率順に列挙したもの。この並行・類似偈文句によって、仏典の典拠・定型句などを知る手がかりを見出すことができる。

また、第11号は文部科学省科学研究費（日本学術振興会）の助成を受けた「梵文法華経諸問題解明のための基盤テキスト構築－『ケルン南條本』校訂へ向けて」（JP21K00058）における研究成果であり、梵文法華経研究の標準・基準テキストである『ケルン・南條本』の脚注の補完の一部である（同叢書第６号第１分冊を2022年４月28日付、同８号第２分冊を2023年３月20日付、同９号第３分冊を2024年２月15日付で既刊）。

『ケルン・南條本』とは、ケルン（Johan Hendrik Caspar Kern, 1833-1917年）と南條文雄（1849-1927年）の両氏による梵文法華経写本を用いた初の校訂本で、1908-1912年の５年間で５分冊として刊行された（本文全490頁）。南條氏による序文には、約30年以上の歳月にわたり９種類の写本を蒐集・編纂したとある。しかし、『ケルン・南條本』はその編集方法に①脚注の不備、②異なる書写年代・出土地域を区別しない写本の校合、といった複数の問題が写本研究者たちによって発刊当初から指摘されてきた。この問題を解決すべくいくつかの改訂本が刊行されたが、いずれも『ケルン・南條本』と同様な編集方針であり、①と②の問題を110年以上も払拭することはできなかった。

本叢書はこの問題を解決する一つであり、『ケルン・南條本』297-385頁：第14章**bodhisattva-pṛthivīvivarasamudgama**（「妙法蓮華経従地涌出品第十五」に相当）から第19章**sadāparibhūta**（「妙法蓮華経常不軽菩薩品第二十」に相当）の脚注を補完している。こののち５分冊を完成させ、『ケルン・南條本』の脚注補完全５分冊を合本して出版の予定という。

著者らは研究作業をPC上で効率よく進捗させるため研究環境を整備してきた。梵文法華経写本ローマ字本の言語解析には黛千洋研究員（情報工学者）と協働して独自開発したPCプログラムを活用し、これに媒介させる梵文法華経写本ローマ字本の電子化テキストの作成には本会人事グループ分室スタッフの絶大な協力と支援を得ている。

弊研究所では多くの研究者に供するよう、**A Study of the Sanskrit and Chinese Lotus Sutra**「梵文法華経と漢訳法華経の研究」ウェブサイト上に本叢書のPDF版を入手できるよう公開している：https://www.cari-saddharmapundarika.com/philosophica。

本叢書が多くの世界の仏典研究者に活用され、仏典研究における諸問題解決の処方箋となるよう、また梵文法華経写本の漢訳とされる『妙法蓮華経』について文献学・言語学的な確証を得た法華思想研究に資する基盤資料となるよう願ってやまない。

所報　CANDANA　301号
令和７年７月15日発行
発行所／中央学術研究所　発行者／橋本雅史
〒166-0012　東京都杉並区和田1－2－1
電話（03）3382－5687　FAX（03）3381－9771
https://www.cari.ne.jp/

チャンダナ

栴檀（candana）とは、印度に産する香木で、紫、赤、白などの種類があるが赤を最上とする。熱病を治す効能があるので与楽（よらく）ともいわれ、楽を与えるという。香気が非常に高いので、一葉開いても四十由旬（ゆじゅん）の悪臭を消すと伝えられている。